

岡村柿紅が狂言をもとに、六世尾上菊五郎と七世坂東三津五郎に書き下ろし、大正五（一九一六）年に東京・市村座で初演された舞踊劇です。

次郎冠者	中村翫雀
太郎冠者	中村亀鶴
曾根松兵衛	嵐橋三郎

一、棒しばり

はなぶさ

しゅう

ちやく

じ

し

長唄囃子連中

藤間 勘祖 振付

【解説と見どころ】

宝曆四（一七五四）年に、初世中村富十郎が江戸・中村座で大好評を博した舞踊で、「石橋（しやつきよ）」の代表作。もとは能の「石橋」からきた、獅子の舞踊物です。

当時の舞踊は、すべてが女方の専門でしたので、勇壮な獅子の精を女方舞踊に仕立てたところに趣向があり、今の「獅子もの」の形式が生まれました。

姫と傾城の二通りの演じ方が伝わっていますが、どちらも裾を引いた姿で、女方の美しさと優美さを見せてくれます。今回は、中村鷹治郎が姫に扮して、円熟した女方の美しさを見せてくれることでしよう。

前半は、女心をしつとり見せる「桜づくし」や、扇を使つた踊りなど、女方ならではの美しい踊りを見せ、後半はがらりと様子が変わつて、牡丹の枝を手に獅子の狂いの踊り、最後は石橋で獅子の座に直り幕になります。姫の艶やかさと獅子の豪快さを演じ分けるところが見どころです。

【あらすじ】

とある大名御殿の大広間。姫が脇息に身を傾けまどろんでいる。

夢から覚めた姫は、辺りを飛び交う蝶に目をとめて、蝶に誘われるよう舞い始め、姫の心を迷わせる恋のせつなさを語ります。やがて姫は手獅子を持つて、獅子が蝶に戯れ遊ぶ様子を踊り、続いて振鼓を手にして踊ります。桜の名所を読み込んでしつとり踊る姫でしたが、再び恋に苦しむ身の切なさを語ると、舞う蝶に誘われるかのように、いすこへか去つてゆきます。そこへ姫に仕える女小姓が現れて、石橋の様子を写した屋敷の奥庭。そこへ牡丹の花を手にした獅子の精が現れます。獅子の精は牡丹の花に戯れながら、獅子の座に座り、目出度く舞を納めるのでした。

ある日大名・曾根松兵衛は、所用のため山をひとつ越えたところへ出かけねばなりません。しかし気がかりなのは、留守番の家来・次郎冠者と太郎冠者。いつも主人の留守に酒を盗み飲みし、勝手放題で困り果てています。そこで案じた松兵衛は、太郎冠者と結託して次郎冠者に、こつそり稽古している棒術をやらせます。隙を見て棒を扱いだところを紐で縛つてしまします。ところが片棒扱いだ太郎冠者をも後ろ手に縛り、松兵衛は「これで安心」と出かけていきます。

何故、こんな目に遭わされるのか合点がいかない二人は、よくよく考えてみると、酒を飲まさないためではなくうかと、思い当たります。そうと知った二人は、なおさら酒が飲みたくなり蔵に行つて、工夫を凝らして器用に酒を飲んで、酔つて踊りだします。

そこへ、今日はおとなしく留守をしているだろうと松兵衛が戻つて来ます。情けない思いで一人を叱りつけますが、逆に次郎冠者の酔いのまま、追い回されてしまうのでした。

【あらすじ】

姫	中村 精
女小姓	中村 同
後に獅子の精	中村 同
中 村 鷹 治 郎	中 村 鷹 治 郎
中 村 鷹 祐	中 村 鷹 祐
中 村 審 祐	中 村 審 祐
中 村 鷹 洋	中 村 鷹 洋
中 村 鷹 乃 助	中 村 鷹 乃 助
中 村 扇 乃 丞	中 村 扇 乃 丞
中 村 鷹 治 郎	中 村 鷹 治 郎
同 同 同 同 同	同 同 同 同 同
力者	